

## ●執筆要項（2018年3月30日付）

### 1 原稿の言語

日本語とする。

### 2 原稿の順番

第1頁（表紙）に、論題、氏名、所属を記す。また、投稿者（共同論文の場合は代表者）の連絡先、電話番号、ファックス番号およびeメールアドレスを明記する。

第2頁に、論題、氏名、所属、論文要旨、キーワード（5項目以内）、英文論題、英文氏名、英文所属、英文論文要旨、英文キーワードの順で記述する。ただし、上記項目を1頁以内に収めること。

第3頁以降に、本文（図・表を含む）、注、参考文献、補遺（もしあれば）の順で記述する。ただし、謝辞は記載しないこと。また、執筆者が推測されるような表現を避けること。

### 3 原稿の書式と頁数

(1) 応募原稿は、普及しているワープロソフト（Microsoft Word など）による横書きで、A4判用紙に1頁40文字×36行を基準とする。原稿は、第1頁の表紙以外の論題、氏名、所属、要旨、キーワード、本文、図・表、注、参考文献を含め、原則として刷り上り13頁以内とする。

(2) 原則として原稿の印字ポイントは本文10.5ポイント（明朝）、参考文献・文末注9ポイントとする。英文および数式については英字入力（Times New Roman フォント使用）する。

※ 節・項の区切りの部分では1行スペースを入れること

### 4 基本構成

節・項は、下記のように付番する（数字のない節立ては避ける）。字下げの必要はない。

- (例) I あいうえお  
1 かきくけこ  
(1) さしすせそ  
① たちつてと

### 5 文章表記

- (1) 横書き、新かなづかい、当用漢字、新字体使用を原則とする。  
(2) 本文の句読点は、原則として、句点（。）と読点（、）を使用する。  
(3) 和文の引用には「 」を使用する。

### 6 注

(1) 注記は内容注のみとし、引用箇所の表示は本文中に著者名、発表年と頁を（ ）で囲んで入れる。

(例) 「……」という見解もある（佐藤，1997，36頁）。

……と解釈されている（鈴木，2000，54-58頁；田中，2016，27頁）。

秋本（2000，63-67頁）によると，

「……」という見解もある (Sato, 1997, p.36)。  
……と解釈されている (Suzuki, 2000, pp. 54-58 ; Tanaka, 2016, p.27)。

(2) 注番号は ( ) を付した算用数字で記入する。

(例) ……である (1)。

(3) 注記は、本文の後 (参考文献の前) に文末注として記載する。脚注は用いない。

## 7 図・表の作成

(1) 図・表は、それぞれ区別せず [図表] とし、上部に通し番号とタイトルを付けて本文中にそのまま入力・配置する。

(例) [図表 1] ●●●

[図表 2] △△△

(2) 引用した場合は、その出所を図表の下に明記する。

(例) (出所) 佐藤 (1997, 36 頁) をもとに一部修正。

## 8 参考文献

参考文献は、原則として以下の表記に従うこと。

(1) 参考文献 (通常の出版物、雑誌論文) の一覧は、論文の最後に、和文献 (著者氏名の五十音順)、洋文献 (ファミリーネームのアルファベット順) の順に記載する (注を使った文献表示は避ける。ただし統計報告書・新聞・政府文書・ホームページ (アドレス含む) 等はこの限りではない)。文献リストには通し番号をつけない。

(2) 書物名・雑誌名は、和文の場合は『 』、欧文ではイタリックとする。

(3) 論文名は、和文の場合は「 」で囲む。

(4) 文献は次の順序で表記する。詳細は下記の例示を参照すること。

単行本 : 著者 (编者) 名, 発行年, 書物名 (副題とも)・版, 発行所。

論文 : 著者名, 発行年, 論文名, (収録書物の著者 (编者) 名,) 雑誌名 (または収録書物名), 巻数, 号数, 頁数。

(例)

斎藤静樹 (2014a) 「経済制度国際統合のレベルと経路一会社法と会計基準の選択肢」『企業会計』66 (1) : 17-24 頁。

斎藤静樹 (2014b) 『企業会計入門』有斐閣。

角ヶ谷典幸 (2014) 「認識と測定」平松一夫・辻山栄子編著『会計基準のコンバージェンス』(体系現代会計学第4巻) : 177 - 211 頁。

Bens, D. A., W. Heltzer, and B. Segal (2011) The Information Content of Goodwill Impairments and SFAS 142, *Journal of Accounting, Auditing and Finance* 26 (3) : pp. 527-555.

Bromwich, M. (1985) *The Economics of Accounting Standard Setting*, Prentice Hall.

Bruchey, R. (1975) *Growth of the Modern American Economy*, New York. (石井修・米田 巖 (訳)  
(1980) 『米国経済史—人間と技術の役割』日本経済評論社)

Filip, A., T. Jeanjean, and L. Paugam (2015) Using Real Activities to Avoid Goodwill Impairment

Losses: Evidence and Effect on Future Performance, *Journal of Business Finance and Accounting* 42 (3-4) : pp. 515-554.

Paugam, L., and O. Ramond (2015) Effect of Impairment-Testing Disclosures on the Cost of Equity Capital, *Journal of Business Finance & Accounting* 42 (5-6) : pp. 583-618.

Ramanna, K., and R. L. Watts (2012) Evidence on the Use of Unverifiable Estimates in Required Goodwill Impairment, *Review of Accounting Studies* 17 (4) : pp. 749-780.

## 9 その他

論文間または雑誌内の記述スタイルの統一を図るため、文章、かなづかいなどについて、編集委員会および編集部が修正することがある。